第二回「え、科学哲学ってそんな意味なの?」(20241008)

B「では、飯田隆と古田智久の両先生による英語論文を読むか[10]」

A「あれ、東大科哲の話をするんじゃなかったんですか?」

B「まあ、いつもながら時間がないので、先に論文を読もう[11]」

A「飯田隆先生はよいとして、古田智久先生というのはどういう人ですか?」

B「飯田先生の弟子筋で、日本大学の教授のようだな[12]。知らんけど」

A「知らんけどって、適当ですね。まあいいです。では、論文を読みましょうか。まず**戦前(1. Before World War II)**ですね」

B「君が一段落ずつ要約してくれたまえ」

A「え。そうなんですか。わかりました。それでは適当にやりましょう。

・西洋哲学は1868年の明治維新後にもたらされたが、それはちょうど西洋で分析哲学が始まる頃だった。とはいえ、分析哲学が影響をもったのは戦後である。
・戦前はドイツの新カント派の哲学の影響が大きかった。
・戦前にもラッセルの哲学書が翻訳されていたが、大きな影響はもたらさなかった。
注にも書いてありますが、ラッセルは改造社の誘いで1921年に日本に来るんですよね。死亡説も流れたりして、何か大変だったとか。」

B「ラッセル来日については以前調べたことがあるが、次のような新聞だな」

---

[10] Iida, Takashi, and Tomohisa Furuta. 2022. "Analytic Philosophy in Japan 1933–2000." Asian Journal of Philosophy 1 (1): 1–24. https://doi.org/10.1007/s44204-022-00032-4. なお、飯田隆は『分析哲学 これからとこれまで』（勁草書房、2020年）でも日本の分析哲学の紹介をしている他、『哲学の歴史11』(中央公論新社、2007年)のコラム「戦前日本の言語哲学・科学哲学」「日本の分析哲学」でも歴史的回顧をしている。古田智久は以下の論文も書いている。古田智久. (2018). 日本における科学哲学と分析哲学の歴史的関係. 科学哲学, 51(2), 47–64.

[11] 簡単には、駒場科哲のHPに歴史が記されている。http://hps.c.u-tokyo.ac.jp/about/history/index.php 創設者の玉蟲文一については、記念論文集である『科学と哲学の界面』(大森荘蔵+伊東俊太郎、朝日出版社、1981年)などにも少し記述がある。

[12] 下記で研究紹介がなされている。https://dept.chs.nihon-u.ac.jp/philosophy/teacher/tomohisa-furuta/

哲人ラッセル教授の來朝

來四月我國各地で講演

去る十月上海に着いたベルトランド・ラッセル教授は爾來支那各地に於て熱烈なる歡迎裡に得意の講演を續けて居るが傍ら雜誌改造社に於て北京大學を通じて同教授の來朝を懇請中の處今回其承諾を得茲に我國は來る四月親しく世界的哲人を迎ふる事が出來る事になつた、尚同氏の講演時間數は左の通りである

△京都八時間△大阪八時間△東京二十時間

東京朝日新聞19201107より

ラッセル氏遂に絶望

支那を巡講中北京で急性肺炎に冐され回復見込なく

二十七日永別式を行ふ

―北京特派員發

講演に支那知識人の熱望を集めたるバートランド・ラッセル氏は數日前より急性肺炎に冐され二十三日より獨逸病院に入院中の所其後病勢昂進し二十六日より人事不省の狀態に陥り醫師は施術を斷念し恢復の見込なく二十七日永別式を行はるべし

◇ラッセル氏と筆蹟

偏見や

極端な

未來を嘱望された氏一流の論法

餘り一本調子であつたが世界思想界の大損失

◇桑木嚴翼博士談

樂しみ

名門の出

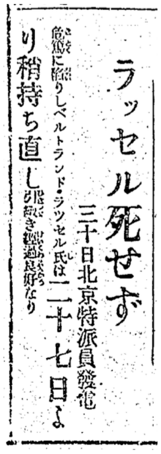
本年四十九歲の同氏 非戰論を唱へて禁錮の處刑

◇卒業後

◇痛烈な

◇日本に

東京朝日新聞19210328より


ラッセル死せず
三十日北京特派員發電
危篤に陥りしベルトランド・ラッセル氏は二十七日より稍持ち直し引續き經過良好なり

東京朝日新聞19210331より

A「迷惑な訃報ですね。戦前の続きを見ましょう。
・戦前に科学哲学(分析哲学)を導入するのに最も大きな貢献をしたのは、生物学者の**篠原雄**(しのはらたけし)。彼は総合科学をウィーン学団とは独立に構想しており、1933年総合科学協会を設立。
・中国との戦争が起こるまで**『綜合科学』1934-1938を発刊していた(全23号)**。綜合科学協会は1939年に解散。1942年にウィーン=シカゴ学派という本でシュリックの翻訳などが出版された(おそらく上記の雑誌の内容をまとめる形で)。この本、京大の蔵書にはないようですね。
・篠原はとくにカルナップに共感していた。1949年には**科学論理学会**を設立。これがのちの1968年に科学哲学会になる。」

B「篠原は東大の理学部で動物学を学んだようだね。また別の機会に話すが、篠原雄の友人に北川三郎というのがいて、彼はH.G.Wellsの世界史の本(『世界文化史概観』邦訳1939年)を訳していて、綜合科学というのは早世した彼の発想だったようだ[13]。北川は**玉蟲文一**の友人でもあり、玉蟲が駒場東大に科哲を作ることになる。」

A「なるほど。で、続きですが、
・**東大・京大でも論理実証主義は認知されていた**が、影響力を持っていなかった。とはいえ、永井成男などは篠原の影響を受けてのちに科学哲学会の会長になる。」

B「永井は東京医科歯科大学の前身にあたる東京医学歯学専門学校を出てから早稲田大学文学部で哲学を学んだようだな[14]。彼にしても、東大京大の哲学ではなく、分析哲学や科学哲学がとくに戦前は本流ではなかったことがよくわかる。」

A「そうですね。あれ、そういえばこの論文、科学哲学については用語的な説明がありますが、分析哲学については何も説明してなくないですか」

B「それはこの論文を読むぐらいの読者であれば自明ということではないか」

---

[13] https://www.jstage.jst.go.jp/article/jssej/6/3/6_KJ00003721652/_pdf
http://hps.c.u-tokyo.ac.jp/about/history/index.php
[14] 東京医科歯科大学は先日2024年10月上旬に東京工業大学と合併して東京科学大学になった。

A「あ、そうですね。そうですよね…では、ちょっとその自明な分析哲学について、無知蒙昧な私に説明していただけませんか」

B「むう。定義的に言って、自明なものを説明するのは困難だが」

A「まあそう言わずに。それに自明と言っても、「分析」と「哲学」で二つに分析できるじゃないですか」

B「では、試みてみよう。この古田先生の別の論文では次のようにあるな。「「分析哲学」については、21世紀の現在では、それは哲学の研究方法の一つ、すなわち、「分析」ないしは「哲学的分析」という方法に従う哲学研究のスタイルと考えられている。」長くて面倒なんでスクリーンショットしよう」

> 他方,「分析哲学」については,21世紀の現在では,それは哲学の研究方法の一つ,すなわち,「分析」ないしは「哲学的分析」という方法に従う哲学研究のスタイルと考えられている.この場合の「分析」とは,概ね,ある複合的な概念や語句をより単純な要素・部分に分解resolutionしていくこと,あるいは,ある文や式をより根本的な文や式・前提となる文や式に還元reduction・変形transformationしていくこと,さらには,ある概念や語を別の概念や語を用いて定義definitionしたり解明explicationしたりすること,ある文を別の文に言い換えたりparaphrase翻訳したりするtranslateこと,等々と考えられる.例えば,*Stanford Encyclopedia of Philosophy*では,次のように

古田智久. (2018). 日本における科学哲学と分析哲学の歴史的関係. 科学哲学, *51*(2), 47–64.

B「などと書いている。そのあと、思考実験の話もしていて、思考実験も現在の分析哲学の主要な方法だと述べている(pp. 48-50)」

A「説明をコピペで済ませましたね。まあよいでしょう。続いて、**戦後1945-60(2. After the war 1945-60)**ですね」

B「うむ。ここも紹介してくれたまえ」

A「また私ですか」

B「他に学生がいないんだから仕方ないだろう」

A「仕方ないですねえ。
・戦後日本で最初に影響をもったのはマルクス主義と実存主義(サルトル)。

・大学の哲学は京都学派の哲学者が戦争協力したとして批判されたが、西洋哲学の著作を原著で精読するという姿勢は変わらなかった。

B「これはちょっと単純化しすぎな気がするな。むしろ、田中美知太郎が西田のことをギリシア哲学をてんでわかっていないと批判したように、戦後はさらに禁欲主義的な、西洋哲学を精読するという姿勢が強くなったのではないか[15]」

A「そうかもしれませんね。この論文は概して京都学派に冷淡ですよね。それはともかく、
・若い哲学者が分析哲学を始めたところが新しい展開。これには冷戦の影響と戦後の科学信仰の影響がある。
・日本の共産主義化を防ぐため、アメリカ哲学を普及させようとしてアメリカ研究セミナーが1950年から56年まで開かれた。モートン・ホワイト、フランケナ、クワイン、デヴィッドソンなどが来た。1955年には京都哲学セミナーも開催された。」

B「この話はひどくおもしろいな。もう少し先のところで書いてあるように、東京ではこれに大森荘蔵や沢田允茂(さわだのぶしげ)や山本信が出て、米国に留学するきっかけになるようだな。ちょっと沢田の文章を引いておこう。

> ところでこれらの本の出版以上に大きな影響を及ぼしたのは1951年から開始されたスタンフォード大学と東京大学との間で夏季を利用しておこなわれたアメリカ・セミナーに於いて，スタンフォード大学のJ. ゴヒーン教授によるアメリカ哲学の紹介であった．それは，アメリカにおける論理実証主義，それへの批判を通じて生まれた，いわゆる分析哲学の解説が中心だった．始めて聞いた新しい哲学の考え方に対して，最初の年次の出席者のなかの多くの哲学者は，この思想にたいしてとまどいを感じ，何とか反論したいという気持ちに充たされていたように思われた．しかし第2回目の年次の講義，特にハーバード大学のモートン・ホワイトの講義を聞いた人々になると，むしろ積極的にこの新しい哲学を学ぼうという態度に変ってきた．そし

[15] 竹田篤司『物語「京都学派」』の205頁のあたりの記述がおもしろい。

てこの新しい哲学を理解するためには，その基礎となっている新しい論理学（当時記号論理学とか数学的論理学と呼ばれていた）を知っていなければならなかった．しかし当時の日本にはこの新しい論理学の本はまだ存在していなかった．そこでこの思想に関心を持ち始めた哲学者たちはヒルベルト，アッカーマン著の *Grundzüge der theoretischen Logik* か，あるいは1947年に出版されたH. ライヘンバッハの *Elements of Symbolic Logic* を読んで自分で勉強せざるを得なかった．

同時にアメリカの資金による多くの留学制度が出来上がって，多くの日本の学者が（哲学研究者もふくめて）アメリカの諸大学へ留学研究する機会が増えてきた．特に論理実証主義の分析的—綜合的な命題の二分論を批判して，いわゆる分析哲学への方向を決定づけるのに大きな影響を与えたM. ホワイト，及びW. V. クワインのいたハーバード大学は当時のアメリカ哲学の唯一の中心地であった．大森荘蔵も私自身も殆んど同時にハーバード大学にアメリカの資金で留学し，この新しい哲学思想の中心地の一つに直接に接触することができたのであった．

大森荘蔵も私もハーバード大学でクワインの（云うまでもなく新しい）論理学の講義を聞いていたのだが，その頃，日本国内ではまだまだ新しい論理学に抵抗が多く，特にマルクス主義の哲学者の立場からの批判には，まだ弁証法論理を唯一の論理であると信じ，形式論理学（実は伝統的な形式論理学がその敵対者だったのだが）に対する過去の反論のやり方で新しい論理学を批判していたため，新しい論理学を知っている者の立場からは全く的外れの噴飯ものの批判がまかり通っている状況であった．ある日，ケンブリッジ市の下宿先で，このような形式論理学の批判がのっている日本から送られてきた雑誌をみながら，私と大森君とは「自分たちは日本に帰ったら，このような日本の哲学の古い体質を打破ることに互いに協力し合おう」と語り合ったことを私は今でもはっきりと覚えている．

沢田允茂. (1997). 日本における科学哲学の歴史. 科学哲学, *30*. 4-5.

A「長い引用ですね」

B「まあ、当時の感じがわかっていいじゃないか。ちなみにこの最後のあたりの「弁証法論理学か新しい記号論理学か」という話は、沢田の岩波新書の『現代論理学』の最後の方でも怒りを込めて書かれている。同一律や矛盾律を前提する論理学は弁証法的な運動や変化を説明できないというマルクス主義の批判に対して、それは形式論理学を根本的に誤解していると批判している。ついでに、モートン・ホワイトの『日本人への旅』(翻訳：新思索社、1988年)からも引用しておこう(翻訳31-33頁)。1952年に彼がどのような講義をしたかという話だ」

私は自分のハーバードでのアメリカ哲学の授業の内容を教える予定であった。それはハーバート・スペンサーに対するアメリカの反応に始まり、ジェイムズ、ロイス、サンタヤーナ、パース、デューイの哲学や、他のアメリカの巨人へと流れていくものであったが、分析哲学について語るように私に勧めたジョン・ゴーヒーンは正しかったことが、私にはすぐにわかった。セミナーでの典型的な学生は、一九五二年のアメリカ哲学に何が起こっているのかに、もっぱら興味があった。だから私は、当時アメリカ人哲学者の心を占めていた主要な思想の概説から始め、私が何を正しいと考え、私がそれらの思想の中でどれが問題であると考えているかということの指摘から始めたのである。

アメリカ哲学の初期の歴史を扱わなければならないと気にかけながら、私はロイス、ジェイムズ、サンタヤーナ、デューイ、そしてパースの思想へと進んでいった。学生たちにとって、私の見るところ、歴史的にこれで不充分というわけではなかった。むしろ、学生の中にはあまりにも歴史的だと感じていた者もいたのである。私自身はアメリカ哲学史に興味を持ってはいたが、このことに私はおおいに元気づけられた。というのは、どこかの西洋のひとつの国の哲学に執着し、その専門家として残りの生涯を生きるという伝統的な慣習に対して、若い日本の哲学者が抵抗するような、少なくとも何らかの傾向があるのをこのことは意味しているからである。明治時代初頭以来、日本の哲学の大きな禍は、多くの日本人自身の言によれば、体系的な哲学の諸問題に対する、直接で真摯な対決の試みが欠如していたことである。その一般的な姿勢は、かつて哲学専攻の学生が自分を東京大学の《西洋哲学科の学生》と自己紹介していたということでよくわかるであろう。彼は哲学の学生ではない。西洋哲学の学生なのである。同様に、教師は哲学という分野の教師と自分を見なしてはおらず、カントの専門家、ヘーゲルの専門家、あるいはフッサールの専門家であると考えている。一九五二年の日本の哲学者たちは哲学の世界を、そこに自分を生涯の早い時期に位置づける大きな地図と思っていたのである。自身をカントの領域に置けば、生涯そこに固定される。その時以降、彼はカントについて講義するだけでなく、カントの目を通して人生を見、いかなる所与の問題に対してもカントの立場を提示する責任を負うのである。時には、有名な西田博士の場合のように、ヘーゲル哲学と仏教を融合させようという試みもあった。だが通常は奴隷のように、偉大な西洋人哲学者、ドイツ人哲学者がとくに

好まれたが、その人物に傾倒することが、日本において哲学をする唯一の方法であったのである。これに対して、私が戦おうとした二つの反応があった。ひとつは、いわば彼らの父親が自分をドイツ人哲学者に傾倒させたように、ジェイムズや、デューイや、パースといったアメリカ人哲学者に、彼らが自分を傾倒させることであった。もうひとつは、アメリカ哲学というものを、批判的に研究されるべき一群の諸思想とは見ず、単にアメリカ経済やアメリカの国民性を知る指標として考えるものであった。第一のものは、アメリカを真似る、よく知られた日本人的傾向の現われであった。第二のものは、社会階級の利益を代表するひとつのイデオロギーとして西洋の哲学を見る、日本人マルクス主義者の性向と結びついていた。

彼らの教師たちがかつて持っていた姿勢に対する反応ではあるが、このようなそれ自身疑問視さるべき反応に影響されているとは言っても、全体としてみるとセミナーの学生たちは、体系的な哲学について何かを学ぶことに真剣な興味を抱いていた。しかしながら、彼らは認識論や、倫理学、あるいは形而上学におけるより技術的な問題に興味を持っている時でさえ、純粋な論理分析に対してある程度疑念を感じているのであった。彼らは哲学と日常生活とを結びつける必要を感じているようであり、そのために多くの若い日本人哲学者はマルクス主義を魅力あるものと思っていた。彼らの考えでは、マルクス主義は人間と宇宙に関する全体的な見識と、したがって、さまざまな分野での知的な努力の中での諸問題を検討するための展望を与えてくれるのである。

A「なるほど、「明治時代初頭以来、日本の哲学の大きな禍は、多くの日本人自身の言によれ

ば、体系的な哲学の諸問題に対する、直接で真摯な対決の試みが欠如していたことである」というのは、飯田先生らの批判でもありますね。」

B「そうだな」

A「元に戻りましょう。モートン・ホワイトの最後のあたりの記述と関係しますが、
・中村秀吉(ひできち)などのように、分析哲学とマルクス主義を結びつける動きもあった」

B「あ、沢田先生の長い引用をして忘れるところだったが、京都はどうやら同志社でセミナーがあったようだな。学部はICU、大学院は京大で学んだ野本和幸先生が次のように書いている。

当時 J.ゴーヒン教授（Stanford）がフルブライト交換教授として京大に滞在され，ホワイトヘッドのMetaphysics等の特殊講義やG.E.モア，スティヴンソン以降の英米倫理学の演習を担当された．また同志社で開催された夏季アメリカン・セミナーでは哲学講師を勤められたので，われわれ何人かの院生も参加した．野田先生の哲学演習で私はR.ヘアの新刊*Language of Morals*を紹介したりした．武田弘道先生（大阪市立大）が，当時京大に講演に来られた，例えばM.ブラック，M.ホワイトや東京の科学哲学の方々（中村秀吉，大出晁，吉田夏彦等の諸氏）への京大院生の窓口であった．また以前には近藤洋逸教授（岡山大学）の数学思想史，杉原丈夫教授（福井大学）の論理学講義等もあった由であるが，私の修士の頃には石本新教授（東京工大）が論理学を教えに来られた．Kalish-Montague: *Technique of Formal Reasoning*や，ノ

ヴィコフの石本訳『記号論理学』を適宜参照しつつ，ゲンツエンの自然演繹やゼクエント算の骨子を教えて下さった．私はあまり熱心な学生ではなかったが，工学部から転部してきた内井惣七氏はたちまち熟達していった．そのうち，院生仲間数人で無謀にもA.チャーチ：*Introduction to Mathematical Logic*（1952）に挑戦しようということになり，どう手配をされたのか，神野さんは，そのコピーを作成し，製本までしてくださった（当時はいまのように院生が簡単にコピーをとるなどということは，不可能だった）．チャーチの著書は初学者には手強く，Exercizeをこなせるのは，木村慎哉氏（後に立命館大学教授，ストローソンの許に留学されたが，惜しくも早逝，遺著『知覚と世界』(1971)）や内井氏くらいであった．私はといえば，そのIntroductionで，G.フレーゲについて長い解説がなされ，また哲学科書庫で，当時最新の論理学史：W. & M. ニール：*The Development of Logic*（1962）で，アリストテレスとフレーゲに最大のスペースが割かれていること，P.ギーチ & M.ブラック訳の*The Philosophical Writings of Gottlob Frege*（1952）やG.パツィッヒ編のFrege論文集：*Funktion, Begriff, Bedeutung*（1962）が発刊されたことを知った．またE.アンスコム & P.ギーチ：*Three Philosophers: Aristotle, Aquinas and Frege*（1962）（後に『哲学の三人』として訳出）という異色の組み合わせに驚いたりした．こうして私は，ラッセル，ウィトゲンシュタインが等しく敬意を払うG.フレーゲに多大な関心を抱くようになる．その後，院生たちはその頃漸く翻訳の出版されたクワイン『論理学の方法』（大森荘蔵・中村秀吉訳）をテクストに論理学研究会を続けられたようである．

野本和幸. (2017). 日本科学哲学会50周年の回顧. 科学哲学, *50*, 1–32.

A「内井先生!」

B「この神野さんというのは神野慧一郎のことで、のちにはヒューム研究者として有名になるが、この野本の回顧録によるとLSEでポパーに教えてもらったようだな。野本の論文は京都の状況もわかっておもしろい」

A「やたら詳しく書かれていますね。記憶力よすぎでしょう」

B「まあおそらく日記をまめに書いていたんだろう。さて、続きにいってくれたまえ」

A「はいはい。
・1954年のアメリカ研究セミナーの論文は『分析哲学研究論集』に収録された。編者は植田清次(早稲田大学卒、早稲田大学教授)。アメリカ哲学研究会を1953年に設立し、上記論集は1960年まで毎年出された(『分析哲学研究論集』その1-5 早稲田大学出版部 1954-60)。このアメリカ

哲学研究会と日本科学論理学会が毎年合同で大会を開き、それが68年に合併して日本科学哲学会になる。」

B「この点も沢田先生が次のように書いているよ」

同じ頃，この科学哲学の展開の刺激を受けて，さきの東大一スタンフォード大学のアメリカ・セミナーに出席していた哲学者が中心になって，早稲田大学教授の植田清次を中心に結成されていた「アメリカ哲学研究会」と，東京教育大学のなかで京都学派の影響とは全く別の，戦前にウィーン学派の翻訳などを試みていた中村克己，伊藤誠，篠原雄，白石早出雄，吉岡修一郎，坂崎侃などの，当時の主流に属さない哲学者，数学者などで作っていた「科学論理学会」が合同して年に一回「科学哲学大会」をもつようになった．後にこれが学会となって現在の「日本科学哲学会」(科学基礎論学会が湯川氏の反対がなければこの名称になっていたかもしれない）となった．考えてみると湯川氏が科学哲学の名称に反対したということは，その当時までは科学者のなかに哲学的な関心を持っていた人々は（勿論湯川氏自身や山内氏ら僅かの人を除いてではあるが）少なかったということを物語っている．

沢田允茂. (1997). 日本における科学哲学の歴史. 科学哲学, *30*. p. 7.

A「なるほど。東京教育大学には田辺元の弟子の下村寅太郎もいたようですが、それとはまた別個に科学論理学会があったというんですね」

B「そのようだな」

A「続きです。
・ところで、**科学哲学は「領域としての科学の哲学」と、「方法としての科学的哲学」の二つを意味しうる。**論理実証主義は「**科学の論理**」として日本では理解されていた。そこで(なぜ「そこで」?)戦前の理解を受け継いでいた研究者は二つの意味を区別する必要を感じていなかった。
・「分析哲学」という訳語も使われるようになったが、オックスフォード大学の日常言語学派のような「科学の哲学」と言えないようなものも科学哲学の一部として認識されていた。科学哲学会がまさにそのような二つの意味(科学の哲学と科学的哲学)を体現した学会である。
・分析哲学と言わずに科学哲学と呼んだのは、戦後の日本社会において科学の評価が高かったためであろう。マルクス主義も「科学的」社会主義だった」

B「この、科学哲学と分析哲学がある意味では互換可能な言葉として用いられていたという指摘は古田先生が別のところでも書いているが[16]、おもしろいところだな。」

A「そうですね。私は科学哲学とか科学哲学史というのは科学の方法論とか、物理学や生物学についての哲学をやっているんだと思ってましたよ。内井先生がそうだったし」

B「しかし、それが日本の「科学哲学」の面白いところだ。科学哲学が実質的に分析哲学の牙城になっていたということだ。これは駒場の科学哲学にも当てはまる」

A「なるほど」

B「この節、長いな。ちょっと休憩するか」

A「そうしましょう」

二人、深呼吸する。

B「では、続きをするか」

A「はい。
・科学哲学会が1968年にできる前に、科学基礎論学会(https://phsc.jp/)が1954年にできた。後者は英語では科学哲学を名乗っていた。」

B「この経緯についても沢田1997に詳しい。

この同じ頃に，アメリカの *Philosophy of Science* 誌からの日本でも同じような組織をつくらないかとの提案にもとづいて，この会の発起人会が，たしか東大の山上御殿の会議室で湯川秀樹氏らが中心になって行われた．出席していた松本正夫氏や私はこの会の日本名を「日本科学哲学会」とすることを提案した．しかし湯川氏は「どうも科学者たちは哲学という言葉がつくと敬遠する人が多くて会員獲得に不利だから別の，たとえば科学基礎論学会とでもした方がいいと思う」という意見を述べられた．たしか弥永昌吉氏だと記憶しているが「数学基礎論という学名は既に存在しているが科学基礎論という名称は現に存在していないのだから，何をやるのか見当がつかないから

[16] 古田智久. (2018). 日本における科学哲学と分析哲学の歴史的関係. 科学哲学, *51*(2), 47–64.この論文では科学哲学という語の意味の変遷が紹介されている。

却って不利ではないか」との意見が出された．学会の日本名をめぐって長時間に亘って論議がなされたが，湯川氏の科学哲学という名称へのこだわりが強く，ついに「科学基礎論学会」に決定した．この新しい学会は以前から科学史，科学哲学の研究にたずさわっていた田辺元氏らの京都学派の影響の強い，東京教育大の下村寅太郎，永井博といった哲学者や統計数理研究所の林知巳夫氏らの運営努力によって順調に発展して今日に及んでいる．

沢田允茂. (1997). 日本における科学哲学の歴史. 科学哲学, *30*. 6-7.

A「なるほど、京大のノーベル物理学賞の湯川秀樹が哲学という言葉を嫌がったので科学基礎論学会になったんですね」

B「そのようだ」

A「ではだいぶ疲れてきましたが、次に行きましょう。
・こうして分析哲学は日本で地歩を固め出したが、主流はまだまだ西洋の古典的な哲学者の研究だった。
・戦後に論理実証主義が再度導入されたが、これが戦前とは違うことは、**大森荘蔵の1953年の論文(「論理実証主義」)**を読むとよい。
・戦前の篠原は科学の統一という発想を重視していたが、戦後の留学帰りの大森の力点は後期ウィトゲンシュタイン。
・大森のこの論文でウィトゲンシュタインを知ったものも多いだろう。」

B「大森は1950年代の最初に、最初の米国留学から帰ってきたんだな。それから駒場科哲の講師になり、また米国留学する。これは今度は沢田允茂と一緒するわけだ」

A「この論文は読んでみないといけませんね」

B「そうだな」

A「続きです。
・大森荘蔵は1958年の末木剛博編の本にも寄稿した。分析哲学の巻は、分析哲学の歴史から倫理までカバーしていた。」

B「駒場の教授でウィトゲンシュタイン研究者だった末木剛博による『分析哲学(講座現代の哲学)』有斐閣1958年だな」

コウザ ゲンダイ ノ テツガク

講座現代の哲学 / 山崎正一 [ほか] 編

データ種別	図書
著者標目	山崎, 正一(1912-1997) <ヤマザキ, マサカズ>
出版者	東京：有斐閣
出版年	1958-1965

子書誌情報を非表示

表示件数 50 件

1	1 実存主義 / 原佑編 東京：有斐閣，1958.2
2	2 分析哲学 / 末木剛博編 東京：有斐閣，1958.3
3	3 プラグマティズム / 岩崎武雄[ほか]著 東京：有斐閣，1958.4
4	4 マルクス主義 / 山崎正一編 東京：有斐閣，1958.6
5	5 日本の近代思想 / 山崎正一編 東京：有斐閣，1958.6
6	6 現代文明論 / 岩崎武雄編 東京：有斐閣，1958.1

表示情報 1 - 6 (6件中)

A「この、『講座現代の哲学』、おもしろいですね。とくに岩波書店からではなく有斐閣が出ているところが。何があったんですかね」

B「なんだろうな。あとで培風館の話が出てくるが、たしかに岩波は60年代になるまでなかなか分析哲学の本を出さなかった(沢田の新書『現代論理学』が1962年、モノグラフが1964年)。東大や京大の哲学科と同じで、なかなか新しいものに対応できなかったんだろう。次の沢田允茂の回想がおもしろいな」

大森君や私がハーバード大学での留学を終えて帰国した1950年代の後半から1960年代にかけて，日本の思想界には新しい論理学の教科書がつぎつぎと出版され，また科学者と哲学者の対話が活発に行われるようになった．そのような活動のきっかけとなったものの一つに，アメリカのアジア財団の資金援助による（概ね年一回行われた）数学者，科学者，哲学者を中心としたシンポジウムであった．このシンポジウムを通じて，私は湯川秀樹氏を始め，多くの数学者，物理学者と知り合うことができた．この二回目か三回目だったと思うが，日光の金谷ホテルでのシンポでは西田幾多郎氏の門下であった哲学者も参加して討論が行われた．会が終わってホテルのカフェーでお茶を飲んでいたとき，共に参加しておられた東京大学の物理学の山内恭彦氏が側にいた私に次のようなことを云われた．「どうも京都の年寄りの哲学者たちは，何かというと有即無だとか一即多などと云うので科学者と討論しても，科学者には話が通じない．もっと若い，科学者と話が通じる哲学者と科学者とで議論する別の会を作った方がいいのではないか」ということで私自身も大森君たちも賛成した．その結果，山内恭彦氏が同じアジア財団からの資金援助の下に「科学と哲学の会」という20人程度の数学者，科学者，哲学者からなる会を組織して毎月一回それぞれの専門分野の著名人に話をしてもらって討論することになった．年に一回は東京以外の地方の大学に会場を依

(沢田允茂. 1997. “日本における科学哲学の歴史.” 科学哲学 30. 5-6頁)

A「京大、ダメダメだったんですね」

B「とはいえ、先に引用した野本和幸が記しているように、関西でもまったく動きがなかったわけではないよ。とくに大阪市立大学だな」

A「続きです。
・1954、1955に分析哲学のライヘンバッハの『科学哲学の形成』(みすず書房)やエアの『言語・真理・論理』がそれぞれ市井三郎と吉田夏彦によって翻訳された。エアの本が岩波書店から出されるよりも前にマルクス主義者のMコーンフォースによる『哲学の擁護 : 実証主義とプラグマティズムに対して』が1953年に同じシリーズから出された」

B「市井は阪大理学部卒で、その後イギリスに渡ってポパーの指導を受けている。吉田は北大で哲学を学び、東京工大の教授などをする人物だ。後半は、岩波はエアの論理実証主義の翻訳を出す前に、先にマルクス主義者の論理実証主義批判の翻訳を出していたという指摘だな」

A「次行きます。
・セラーズ、ホスパーズ編のReadings in Ethical Theoryが5巻本で『現代英米の倫理学』として1959年に翻訳された。(現代倫理研究会編、福村出版)
現代英米の倫理学5巻本の翻訳も偉いですね」

B「下記の序言にあるように、民主教育協会とかアジア文化財団とか、反共的な力も働いているところがおもしろいな」

監 修 者 序 言

本書は Readings in Ethical Theory, Selected and Edited by Wilfrid Sellars and John Hospers (New York, Appleton-Century-Crofts, Inc., 1952.) を翻訳したものである。

今日イギリス，アメリカの哲学界では哲学的分析あるいは分析哲学とよばれる考えかたが有力であるが，倫理学もまたその傾向にしたがって，倫理的な言語，倫理的な概念，名辞の意味の分析を中心課題として展開されている。本書はムーア以来のその傾向の倫理学の発展の上に重要な意味をもったところの，イギリス，アメリカにおいて発表された著書の一部および雑誌論文を集め，直接の資料によってその発展の大体をわからせるようにしたものである。収めたもの 46 編，もっとも新しいものは 1951 年のものである。もとの編者ウィルフリッド・セラーズ (Wilfrid Sellars)，およびジョン・ホスパーズ (John Hospers) は二人ともミネソタ大学の哲学の教授である。原書は，主として大学の教材として学生に読ませることを目的としている。

翻訳は現代倫理研究会の会員のうちの 25 人が，それぞれの専攻に応じて分担し，全体にわたって矢島羊吉・岩崎武雄・細谷恒夫が監修した。できるだけわかりやすく訳すことを心がけた。聞くだけでわかることば，したがってかなで書いてもわかることばを，いちおうの標準としたのである。訳語についてはかならずしも機械的な統一をはかることはしなかった。各論文がもともと独立に書かれたものであり，原語も多数の異なった原著者が，それぞれ異なった色合いで用いている場合が多く，同じ原語にかならずしも同じ訳語をというわけに行かないからである。ただ主義の名称などはできるだけ統一した。倫理的なことばでも "ought" を「べき」と訳すことに統一してあるが，名詞の good, goodness は，原著者の用いかたによって，「善」と訳したり「善さ」と訳したりしてある。「善」という語あるいは字は日本語としては，道徳的な意味が

強く，もっと広い意味をもった good の訳語としては，「よい」，「よさ」というようにかなで書き表わした方がよい点もあるが，本書では全体としては道徳的な意味が主になっているので「善」という字を用いることにした。したがって，本書では「善」と書き表わされていても，場合によっては，道徳的でない「よさ」を意味する場合もあるのである。

原文は学術雑誌の論文や著書の一部なので，それだけではわかりにくい点もあり，はじめての読者のためには解説や注の必要もあるわけであるが，何分，本文のページ数が多く，とうてい，詳しい解説や注を加えることができないので，限られた場合にだけ，かんたんな注をそえることにとどめた。ただ英米の現代の倫理学に不案内の人のためにこの論文集に示された新傾向の大体をのべる文章を矢島羊吉が書いて，巻頭にそえることにした。これは，直接の資料によってその大体を示そうとしたもとの編者の意図にはそわないようでもあるが，日本の読者には多少参考になる点もあるかと思われる。

訳された論文はすべてもとの著者の許可をえてなされたのであるが，ラッセル，サンタヤナ，キャリット，バルフォアの 4 氏のものについては残念ながら許可を得ることができなかった。やむを得ず梗概をもって翻訳にかえて全体の理解に支障がないようにした。

快く翻訳の許可を与えられた 20 数人の原著者，もとの編者，もとの出版者各位の御好意に対して深甚の謝意を表する。

民主教育協会はこの翻訳の事業に終始多大の援助を与えられ，また翻訳の許可を得るについてはアジア文化財団とともに各著作者および関係方面と交渉された。これに対してもまた深甚の謝意を表する。とくに民主教育協会のミヤザキ・ヒロシ氏からはこの翻訳の企画，推進の上で一方ならぬ尽力をえた。同氏の尽力がなければこの訳業は実現できなかったであろう。記して深甚の謝意を表したい。

語学上の疑義に関しては，しばしば東北大学教育学部教授長谷川松治氏の教示を得た。記して感謝の意を表する。

A「なるほど。科学哲学や分析哲学の振興は、マルクス主義に対する米国の文化政策でもあったというわけですね」

B「そのようだ」

A「では続きを。
・日本の分析哲学者のオリジナルな研究も始まった。永井成男の著作(『分析哲学 言語分析の論理的基礎』弘文堂1959)では分析のパラドクスに関する独自の見解が示された。
分析のパラドクスとは?」

B「あれだ。ムーアの、correctかつinformativeな分析的定義はできないというやつだ」

A「なるほど。そういうことにしておきましょう。
・吉田夏彦(『論理学』1958)、沢田允茂(『少年少女のための論理学』1958)によって戦前には数学者にしか知られていなかった現代論理学の紹介がなされた。沢田の本は後に岩波新書の『現代論理学』(1962)になった。
・この時期の最後にはラッセルの著作が14巻本で出された。**とくに市井三郎訳による『西洋哲学史』は分析哲学の視点から歴史を眺めたもので、一般読者に分析哲学の感触を伝えただろう**」

B「ラッセルの西洋哲学史がそこまで分析哲学の感じを持っていたとか、読者がそれに気付いたとは思えないがな」

A「第2節は長かったですね。続いて、**第3節「第一世代の成熟した研究1960-1980 (3. Mature works of the first generation 1960-80)**ですね」

B「ここで休憩だ」

第三回「ウィトゲンシュタインはいかがですか?」(20241022)

B「しばらく間が空いたが、気を取り直して再開するか」

A「そうですね。前回は戦前から戦後の50年代終わりごろまでの揺籃期の科学哲学の発展の話だでしたが、分析哲学が「科学的哲学」として日本では紹介され、「科学哲学」という名称で理解されていた、という点が重要だったように思います。あと、**科学哲学=分析哲学は米国ないし西側諸国的な哲学だ**ということで、日本の共産主義化を怖れた米国から研究者が派遣されたり資金提供がなされたりしていたというところも興味深かったです[17]」

B「うむ。大森荘蔵もガリオア資金などを使ってオバーリンに留学したり、その後も奨学金[18]をもらってスタンフォードやハーバードに行っていたしな」

A「その一方で、戦後から60年代末までマルクス主義的な思想は東大でも猛威を振い、70年代前半に過激化しすぎて民衆の支持を失うまで続くわけですね」

B「そうだな。加藤尚武先生はどちらかと言えばこっちの列車に乗って途中下車してヘーゲル研究に沈潜していくわけだが、以下でもあるように、中村秀吉みたいに両者を調停しようとした思想家も現れた」

A「なるほど」

B「ところで、日本では科学哲学の流れの中から誕生した生命科学研究から、やがて生命倫理が出てくるわけだが[19]、ヘーゲル哲学をやっていたが現代科学に関する関心も持ち続けていた加藤は生命倫理の研究が発展していることに独自に気付き、結果的に科学哲学・分析哲学の流れと合流することになる」

A「加藤先生は二浪して東大に入っていますが、たしか最初は理系で受けたんでしたよね」

B「そのはずだ。だが、今は加藤先生の話は置いておいて、第3節を紹介してくれたまえ」

A「はいはい。第3節は「**第一世代の成熟した研究1960-1980 (3. Mature works of the first generation 1960-80)**です。この節では最初に**世代分け**がなされています。
・分析哲学の第一世代は太平洋戦争を経験した1920年代から30年代生まれの人々。第二世代は戦後生まれ(1945年から50年代まで)。第三世代は1960年代以降に生まれたもの。この節では第一世代が扱われる。

---

17 韓国でも同じようなことはあっただろうか?
18 たしかフルブライトだが典拠を忘れた。
19 米国では科学哲学の流れと生命倫理の誕生の関係はあったか? アーサー・カプランは生物学の哲学(社会生物学)をやっていたようだ。英国(オックスフォード)は広い意味で分析哲学(日常言語学派)の中から応用倫理・生命倫理が出てきたと言える。

1948年生まれの飯田先生は1969年に東大に入っているので戦後生まれの第二世代、古田先生は1983年に卒業ということは第三世代の最初の方ですね」

B「うむ。では次」

A「はい。
・第一世代は50年代に早稲田の植田先生編の『分析哲学研究論集』に寄稿したりしていた。**碧海純一編の『科学時代の哲学』で知名度が上がった**[20]。この本を出版した培風館はそれまでは数学や自然科学しか扱っていなかった。
・編者の一人は東大の法哲学者の碧海純一。碧海の『法哲学概論』(弘文堂1959)は論理実証主義に大きく影響されていた」

B「碧海純一は井上達夫の先生だな。法哲学と言えばケルゼンの法実証主義があるが、碧海は論理実証主義やポパーに影響を受けて、かなり分析哲学よりの法哲学をやっていたということだな。弟子の一人の長尾龍一が次のように書いているよ[21]」

2　哲学青年

先生は終戦時21歳、いわゆる「戦中派」である。戦中派の典型的イメージとしては、軍国主義時代に少年時代・青年時代を送り、軍国主義教育・皇国精神に洗脳され、本土決戦を決死の覚悟で迎えようとしていたところで敗戦、環境の激変に一時方向感覚を喪失した後、逆方向の左翼運動に突進するか、一種の実存主義的ニヒリズムに陥るかというような人々が思い浮かぶ。この変身に納得できず、「やはり俺は死ぬべきだったのだ」として自刃した三島由紀夫のような人もいるが。碧海青年はそういう人々とはまるで違っていた。

旧制高校生としてはじめて「哲学」というものに接したわたくしが、この伝統ある学問についてうけた第一印象は、興味と疑惑とのいりまじったものであった。わたくしは、哲学者たちが答えようとしている問題についてふかい興味をおぼえると同時に、かれらがその解決のために用いてきた方法とその成果について名状しがたいほどつよい不信の念をいだいたのである。(『(初版）法哲学概論』「はしがき」)

戦争中「大東亜共栄圏の哲学」なるものを説く哲学者たちの書いたものを読んでみたが、何をいっているのか全然わからない。ＡＢＣといろいろ並べて、「ゆえに」といって結論を出すのだが、ＡＢＣは全然その結論の論拠になっていない。森嶋通夫氏が、昭和十八年の「学徒出陣」の際田辺元が演説して、「諸君は死ぬ。私は生きる、これが生即死の弁証法だ」とかいうのを聞いて、一生二度と哲学者という人種とはつきあいたくないと思ったとどこかで書いていたが、私もまったく同様の印象でしたね。(研究会報告、長尾「碧海先生と弟子たち」『自由と規範』418頁)

その種の哲学への不信から、「日本語で書かれたものはみんなインチキだ」と思い、外国書のみを読み漁った、電車の中で横文字の本を読んでいると、「非国民」だと暴行を加えられる恐れがあり、本にカバーをつけた、という(「読書開眼の記」『時の法令』1096号)。

[20] 『科学時代の哲学〈第1-3〉』培風館、1964年。1 論理・科学・哲学、2 人間と社会、3 自然と認識
[21] 碧海の弟子の一人の長尾龍一による。有斐閣の『書斎の窓』(2014年3月)には他にも弟子たちの回想がある。「碧海純一先生を偲んで（１）　学問と思想」
https://www.yuhikaku.co.jp/static/shosai_mado/html/1403/01.html

A「なるほど。武蔵高校2年生のときにラッセルの本を読み、その後、論理実証主義を勉強するようになったとありますね。たしかにラッセル本も書いてますよね[22]。読んでませんけど」

B「では次」

A「はい。
・また、別の共編者の石本新(あらた)はカルナップに影響を受け、日本科学論理学会(後の科学哲学会)の主要メンバーとなった」

B「石本新は京大理学部出身で科学哲学会の石本基金の人だな[23]。野本和幸先生がこんな回想をされている」

> 日記をつける習慣がないので，正確な日時は定かではないが，故石本新先生のご夫人からお電話を頂いたのは，2005年秋か2006年早春のように思う．単に私の憶測に過ぎないが，石本先生とご親交のあった竹尾治一郎教授（当時大阪教育大学）にご相談されたのか，当時日本科学哲学会会長職にあった私に電話をかけてこられたのではないかと思う．
> 石本夫人には私は面識がなく，石本先生のご遺産の一部を「科学哲学会に寄贈したいが，その場合，学会でどのようにお使い頂けるか伺いたい」というご質問であった．突然のお申し出のことで，咄嗟にその場で思い浮かんだ次のようなことをお伝えする他なかった．
> 「先ず普通に学会などで考えられるのは，例えば①毎年発行の『科学哲学』誌掲載論文から大学院生による最優秀論文に「学会賞」を授与しているが，その副賞として基金の一部を使用させて頂く．②若い研究者（博士課程在学中ないしいわゆるポス・ドクの若手研究者）から課題研究を公募して，2-3年間研究費を支給し，期間終了後成果報告を『科学哲学誌』に公表してもらう．③中堅研究者の研究成果を公募・厳選し，論文博士相当の優れた著作と認定できるものの出版助成を行う．④石本先生がご生涯を賭けて切り開いてこられた，論理学（特にフレーゲやラッセル，あるいはポーランド学派等）・内包論理学の意味論・言語哲学（例えばカルナップやモンタギュを始めとする様相論理学のモデル論や日常言語の意味論等々），そしてより広くは，科学哲学一般に関して，戦後の日本の学界における研究成果のなかから，例えば『分析哲学の起源—フレーゲ・ラッセル・ウィトゲンシュタイン』，『科学哲学の現在—物理学の哲学・生物学の哲学』等々のテーマで，アンソロジーを刊行する，等は，如何ですか？」と思い付きを申し上げた．すると石本夫人は，大変関心を示されて，「分かりました．それではそうしたプロジェクトを援助したい．それで，2,000万円を寄付したい．」と申し出られた．私は

[22] 碧海純一『ラッセル(新装版)』勁草書房、2007年。
[23] 石本基金 https://pssj.info/fund/ishimoto.html

その高額なことに驚いて，しばらく絶句し，「ともかく細部は理事会その他に諮らねばなりませんが……2,000万円ですか！……」と戸惑ていると，石本夫人は何か勘違いされて，「少な過ぎますか？それじゃ，1,000万円足して，3,000万円にしましょう．それでよろしいですか？」と畳み掛けられます．私はといえば，あまりの急展開に「とんでもありません．では歓んでご厚志を受けさせて頂きます．細部については，早急に科学哲学会の理事その他の役員と原案を作成して，改めてご意向を受け承ります．お申し出に心から感謝申し上げます．学会員は望外の朗報にさぞ歓ぶことでしょう」と，しどろもどろの応答をするのが精一杯であった．それから，急遽，科学哲学会事務局に連絡し，理事会を招集してもらい，私は，理事会に向けて，この石本夫人からの申し出にどう応えるか，原案作成に没頭する．以下が，当時の理事会向けの，私のパソコンに残されていた原案である．

野本和幸, ‘日本科学哲学会50周年の回顧’, 科学哲学, 50 (2017), 24-25

A「えっ、ずずずるい。なんで科学哲学会だけこんな大きな寄付が。日本倫理学会にも関西倫理学会にも誰も寄付してくれないのに」

B「もっと有効な使い途があるからだろう。戯言を言ってないで先に進みたまえ」

A「はいはい。
・**『科学時代の哲学』**は3巻本。ここでは第一巻の『論理・科学・哲学』を見る。
・第一巻の第一部は科学的哲学の歴史的概観。ポパーの『開かれた社会』などに影響を受けている。論理実証主義の部分は大森の1953年の論文の再録となっている。
・第二部は論理学と哲学の関係。命題論理学と述語論理学の概観。
・第三部は自然科学と社会科学の取り扱い。
・このように、**本書は従来の哲学書とは以下の点で全然違う内容である。**1、伝統的な西洋の哲学者は無視されている。2、現代論理学の重要性が強調されている。3、哲学と諸科学の関係が再考されている。」

B「たしかにこの内容では、哲学ではないと思った人もおそらく多かっただろう。人文学が哲学からすっぽり抜けているものな」

A「どうなんですかね。その次の段落ですが、次のようにあります。
・その同時期の1963年、1964年に、岩波書店から市井三郎と沢田允茂が分析哲学の本を出し、一般読者に分析哲学が受容され出した[24]
ようやく岩波も科学哲学・分析哲学の流れを無視できなくなったということですね」

B「といっても、『思想』の1956年9月号では、「現代の思想(四)論理実証主義」という特集を組んでいて、市井三郎とか大森荘蔵とか碧海純一だとかが執筆しているようだがな[25]。ちなみ

---

[24] 市井三郎『哲学的分析』（岩波書店、1963）、沢田允茂『現代における哲学と論理―論理的分析と哲学的綜合』(岩波書店、1964)
[25] 岩波書店のエア『言語・真理・論理』の翻訳は1955年。

にこの年の『思想』における現代思想の特集は、(1)が実存主義、(2)はプラグマティズム、(3)はマルクス主義で、最後が論理実証主義だったみたいだな」

A「なるほど、1956年にはそういうのが現代思想だったんですね。次に行きます。
・70年代にオリジナルな研究が出てきた。大森など。
・この時代が一番生産的だったかもしれない。その前は輸入の時期で、そのあとは専門分化していった。
・大森の一冊目は『言語・知覚・世界』(岩波書店、1971)。知覚による世界認識と科学による世界認識の調和を問題にしている。
・二冊目『物と心』(東大出版会、1976)では、一転して両者の調停から知覚的表象の否定(立ち現われ一元論)へ。この路線は『新視覚新論』(東大出版会1982)でさらに追究される。」

B「後者は事物と知覚表象の二元論を否定する話だが、京大倫理の集中講義に来たときの内容が元となっているので[26]、例として京都の賀茂川の話が出てくるやつだな。この機会に大森の文献を読み進めるのが良さそうだな」

A「そうですね。さらに進みます。
・もう一人は黒田亘(わたる)。『経験と言語』(東大出版会1975)『知識と行為』(東大出版会1983)などで、因果性によって志向性を説明しようとした。『行為と規範』(1992)では、行為論をベースにした倫理学の確立をしようとした。
・大森も黒田も後期ウィトゲンシュタインから影響を受けていた。もう一人、ウィトゲンシュタインから強い影響を受けていたのは黒崎宏。『科学と人間—ウィトゲンシュタイン的アプローチ』(勁草書房、1977)など。
ウィトゲンシュタイン、本当に人気だったんですね」

B「とくに東大で大森荘蔵や山本信らが広めていたんだろうな。この点についてはあとでも「関西では流行っていなかった」という言及があるが、誰が日本で布教していたのか、よく調べてみる必要がある」

A「はい。次に行きます。
・ウィトゲンシュタインの翻訳が最初に出たのは1968年。坂井秀寿(東大出身)と藤本隆志(東大出身、駒場東大教授)が法政大学出版会から『論理哲学論考』の全訳と哲学探究の抄訳を出した。
前期ウィトゲンシュタインと後期ウィトゲンシュタイン、一緒に出てきたんですね」

B「うむ、通年ウィトゲンシュタインだな。混乱しなかったのか気になるな。ちなみにこの訳者の藤本隆志に、後輩だった加藤尚武は英米哲学をやった方がよいと勧められたが、断ったという話がある」

A「そうですか。次に行きます。
・分析哲学者の中には、科学的な世界観を批判する後期ウィトゲンシュタインに否定的な者もいた。

---

[26] たしか森口美都男教授のときに呼んだと、藤野寛先生に教えてもらう。なお、「立ち現われ一元論」については大森『物と心』の序文がわかりやすい。

・中村秀吉(ひできち)のようにウィトゲンシュタインと無関係に、分析哲学とマルクス主義を融合させようとした者もいた[27]。
・中村はライル流の非形式的な論理学を用いて現代論理学(形式論理学)と弁証法的論理学を調停しようとした」

B「中村秀吉は『パラドックス』(中公新書1972)ぐらいしか読んだ記憶がないが、日常言語学派的なことを考えていたのかもしれんな。ちなみ青木書店は戦後にできた左翼系出版社だ」

A「なるほど。次に行きます。
・関西では京都学派の影響が強く、分析哲学はあまり広がらなかったが、ポパーの『開かれた社会』(翻訳1963年)を訳した武田弘道(大阪市大)や、竹尾治一郎(関西大学)がいた。ウィトゲンシュタインは関西では支持者が少なかった。

なんでウィトゲンシュタインの支持者が少なったんでしょうか」

B「それは謎だな。京都学派とよほど相性が悪かったのか、単に誰もほとんど聞いたことがなかったのか。ちなみに武田弘道は大阪市大(現大阪公立大学)で、ここはポパーに学んだ神野慧一郎もいたところで、また後にフルブライトで米国から帰国した内井先生が行くところでもある。このあたりの話は関西にいた野本先生の論文に詳しい。野本先生の回想では、神野さんがLSEから戻ってきて京大哲学科の助手だった頃に『論理哲学論考』の読書会をしてもらったとあるな」

> LSE のポパーの許に留学中だった神野慧一郎氏が帰国され助手に就任されたので，ポパーのことをいろいろお聴きし，現代の論理や科学哲学の勉強の必要性を感じて，ポパー：*Logic of scientific Discovery*，C.ヘンペル：*Aspects of scientific Explanations* の独習を始め，神野さんに，ウィトゲンシュタインの *Tractatus*，エアの *Foundations of Empirical Knowledge* 等を読んで頂いた．ハイデガーの許から帰国された辻村公一先生の演習で，ポパーの *Poverty of Historicism* を報告し，よくチョークを投げられなかったなと先輩たちから呆れられた．

野本和幸, ‘日本科学哲学会50周年の回顧’, 科学哲学, 50 (2017), 2

A「なんでチョークを投げるんですか」

B「ポパーはハイデガーをペテン師呼ばわりしているし、論理実証主義の連中はハイデガーの「無が無化する」といった表現をナンセンスだとして、みなハイデガーを毛嫌いしていたからな。逆に京大はハイデガーとかが人気があったから論理実証主義は栄えなかったのかもしれない」

---

[27] 『論理学』 (青木書店、1958年)、『論理実証主義とマルクス主義』(青木書店、1961年)、『科学論の基礎—分析的方法とマルクス主義』(青木書店、1970年)

A「そうですか。次に行きます。
・吉田夏彦、大出晁(おおいであきら)なども活躍した。
・坂本百大(東大⇒青山学院大学)もウィトゲンシュタインに批判的だった」

B「坂本百大は生命倫理学会の創立委員長も務めた人で、いろいろ翻訳も出して一種、黒幕的な人だったようだな」

A「なるほど。
・このようにウィトゲンシュタインの批判者もいたものの、分析哲学はウィトゲンシュタインと強く結び付けられていた。この時期(70年代後半)に全集も出た。」

B「この60年代以降のウィトゲンシュタイン熱が日本の戦後哲学の一つの特徴に思えるな。たくさんお金を出した米国も、こんなに科学的世界観に批判的な後期ウィトゲンシュタインが流行ることは予想していなかったのではないか」

A「とはいえ、後期ウィトゲンシュタインや日常言語学派の研究も「科学哲学」の看板の下で行われたというのがおもしろいですね」

B「そうだな。ここらでちょっと一服するか」

A「そうですね」

二人、深呼吸する。

B「では続きをやろう」

A「はい。**「第二世代の成熟期 1980-2000 (4 Coming-of-age of the second generation 1980–2000)**ですね」
・第二世代は三つのタイプに分かれる。哲学を専門家たちの共同的営みと考えるタイプ(米国での、科学のように哲学が教えられているのを見て感動したタイプ)、分析哲学をやるが、ウィトゲンシュタインに影響を受けて思想と個人の歴史を切り離さすことのできないものとして哲学を考えるタイプ、どちらにも属さないタイプ。
・第二のタイプはウィトゲンシュタインが好きだった

第二世代をさらに三つに分けているんですね」

B「三つといっても、実質は二つで、この区別にもウィトゲンシュタインが関係している。時代が近いので、なかなか思想の流れをまとめるのに苦労しているようにも見えるな」

A「そうですかね。次に行きます。
・第一のタイプは言語哲学や心の哲学のように、学際性が必要な領域にいた。

・言語哲学の主要な人物は野本和幸(1939-)で、『フレーゲの言語哲学』(勁草書房1986)でフレーゲの哲学を日本で本格的に紹介した。『現代の論理的意味論』(岩波書店1988)は現代言語哲学のサーベイである。
・飯田隆(1948-)は『言語哲学大全』(勁草書房1987-2002)で、言語哲学のサーベイを行っている。日本語の意味論についても研究をしている。

本人が出てきましたね」

B「うむ。古田さんは第三世代なので出てこないがな」

A「言語哲学の続きです。
・服部裕幸(ゆきひろ。慶應⇒南山)が『言語哲学入門』(勁草書房2003)、丹治信春(東大⇒都立大)が『言語と認識のダイナミズム：ウィトゲンシュタインからクワインへ』(勁草書房1996)、を書き、山田友幸(東大⇒北大)もこの分野で言語行為論などで論文を書いている。
・金子洋之(ひろし。北大⇒専修)が『ダメットにたどりつくまで』(勁草書房2006)や数学の哲学について書いている。論理学や数学の哲学については、藁谷敏晴(わらがいとしはる。慶應⇒東工大)や岡本賢吾(都立大)がいる。
・土屋俊(東大⇒千葉大)は言語哲学についておもしろい論文を書いており、『言語・哲学コレクション』(くろしお出版2008-2011)に収められている」

B「土屋は千葉大で加藤らと一緒になり、加藤先生がヘーゲル全集をOCRで読み込むきっかけを作った人だな。約束しても守らないことで有名で、土屋さんの約束は「つち約束」として知られていたそうだ」

A「なるほど。次に行きます」
・土屋は心の哲学と認知科学を結びつける仕事もした。『心の科学は可能か』(1986、東大出版会)は認知科学選書に収録されている。この分野は90年代以降発展し、柴田正良(まさよし。東大⇒金沢大)、美濃正(みのただし、京大⇒大阪市立大学)、服部裕幸、信原幸弘(東大)などがいる。
・信原は『心の現代哲学』(勁草書房1999)や『考える脳・考えない脳: 心と知識の哲学』(講談社現代新書2000)などを書いている。柴田も『ロボットの心-7つの哲学物語』(講談社現代新書2001)を書いている。
・心の哲学をやっている研究者にとっては心理学や脳科学の専門家とつながりがあることが重要である。これは個人的つながりや科学哲学会や科学基礎論学会を通して行われた。

このあたり、駆け足ですね」

B「なかなかまとめるのが難しいんだろう。次」

A「はい。
・(科学的哲学とは区別される)「科学の哲学」も共同研究や専門性が必要な領域である。主要な人物は内井惣七。道徳哲学も含めてたくさん書いているが、科学哲学に関するものには、『科学哲学入門』(世界思想社1995)、『空間の謎・時間の謎: 宇宙の始まりに迫る物理学と哲学』(中公新書2006)、『ダーウィンの思想: 人間と動物のあいだ』(岩波新書2009)などがある。

…内井先生!」

B「私も『科学哲学入門』を教科書にした授業に出てひどい点をもらったりしたな。『ダーウィンの思想』が出たときに東京で講演会を聞いて、それが一つのきっかけで進化論と倫理学の関係に関心をもった気がする」

A「そうですか。では次ということで。
・もう一人、科哲の研究を進めたのは西脇与作(慶応大学)。彼の『科学の哲学』(慶応出版会2004)はこの分野の標準的テキストである。
・戸田山和久(東大哲学⇒名古屋大学)は科哲の社会的認知に貢献した。『科学哲学の冒険 サイエンスの目的と方法をさぐる』(NHK出版、2005)、『科学的実在論を擁護する』(名古屋大学出版会2015)などがある。
・中山康雄『科学哲学入門—知の形而上学』(勁草書房2008)や加地大介(かちだいすけ)は分析形而上学への関心を高めた。
・この時期は形而上学と認識論はまだ熱心に研究されず、第一のタイプの哲学者たちの研究はもっぱら言語哲学と心の哲学が中心だった。(ただし、戸田山『知識の哲学』産業図書2002年がある)。80年代以降の研究の流行を追うのが精一杯で、オリジナルな見解は少なかった。

…厳しいですね」

B「**先に70年代がいちばん生産的(fruitful)だった**とあるが、この頃はまた輸入学問的になったのかもしれんな」

A「次に行きます。倫理学がようやく登場ですね。
・この時期に分析哲学が真剣に倫理学に向かうようになった。それまでにもムーアなどの翻訳はあったが、研究の対象ではあっても哲学的議論はなされていなかった。
・80年代にそれが変化した。一方で**大庭健**(1946-2013)がメタ倫理学を含む倫理学の問題を論じるようになり、**加藤尚武**(1937-)と**飯田亘之**(1938-)が日本に生命倫理を紹介した。大庭は英米の哲学者の哲学的議論への積極的参加が必要だと説き、加藤らは実践的問題の解決には我々の道徳判断を再検討し体系化する必要があると主張した。
・大庭は『道徳の理由』(安彦一恵｜大庭健｜溝口宏平 編、昭和堂1992)と『なぜ悪いことをしてはいけないのか』(大庭健、安彦一恵、永井均 編、ナカニシヤ出版2000)の編者になり、また『自己組織システムの倫理学』三部作(他者とは誰のことか、権力とはどんな力か、自分であるとのはどのようなことか、勁草書房、1989-1997)を書いた。
・生命倫理の場合、加藤はヘーゲル学者だったが、飯田は分析的伝統にある道徳哲学者だった。生命倫理学は分析的伝統に出自があるので、ヘーゲルやキルケゴールを研究していた人々は議論を全く異なる仕方で行うことを学ばなければならなかった。これによって、伝統的な仕方で教育を受けた哲学の学生たちに分析的手法がより広く知られるようになった可能性がある。加藤と飯田は『バイオエシックスの基礎ー欧米の生命倫理論』(東海大学出版会1988)を編集し、加藤は『バイオエシックスとは何か』(未来社1986)を書いた。[28]」

---

[28] 加藤ら自身による回顧については、下記を見よ。香川千晶, 金森修, 小泉義之, ほか 「日本における生命倫理学の成立と幕開——加藤帚武・ 飯田亘之・ 坂井昭宏先生へのインタビュー」2004。

B「大庭はいいとして、加藤のところにある「生命倫理学は分析哲学的だ」というのは、どうなのかな。英米では神学者もけっこう加わっていたし、たとえば『バイオエシックスの基礎』に書いていた人全員が分析哲学か、よく調べてみる必要がある」

A「次に行きます。一つ目はかなり雑多でしたが、ようやく二つ目のタイプです。
・**第二世代の第二のタイプ**はウィトゲンシュタインの影響を受けた人々。前述の黒崎宏以外に、奥雅博(1941-2006 東大⇒阪大)の『ウィトゲンシュタインの夢』(勁草書房1982)、『思索のアルバム』(勁草書房1992年)がある。
・佐藤徹郎(東大⇒新潟大)は寡作だが『科学から哲学へ: 知識をめぐる虚構と現実』(春秋社2000)はウィトゲンシュタインの深い理解を示している。
・永井均(1951- 慶應⇒信州大・千葉大・日大)は分析哲学に関心を持つ人以外にも多くの読者がいる。独我論や自己の存在論を論じている。『＜私＞のメタフィジックス』(勁草書房1986)、『<子ども>のための哲学』(講談社現代新書1996)、独我論の重要性を強調した『ウィトゲンシュタイン入門』(ちくま新書1995)、倫理の教科書の『倫理とは何か 猫のアインジヒトの挑戦』(産業図書2003)などがある。
・野矢茂樹(1954-)も読者が多い。論理学や推論についての本の他に、『心と他者』(勁草書房1995-)、『哲学・航海日誌』(春秋社1995)があり、対話篇として書かれた『哲学の謎』(講談社現代新書1996)という哲学入門書や、『無限論の教室』講談社現代新書1998)という数学の哲学の本がある」

B「重要な思想家たちばかりだが、ちょっと一つのグループとしてまとめるのは苦しい気もするな。次」

A「はい。
・**最後に**、分析哲学から影響を受けたが一定の距離を保っている哲学者二名。
・野家啓一(1949- 東大⇒東北大)は、現象学と分析哲学を統合しようとした。『言語行為の現象学』(勁草書房1993)、『無根拠からの出発』(勁草書房1993)という二つの論文集、『科学の解釈学』(新曜社1993)など。
・伊藤邦武(1949- 京大)の場合、分析哲学だけでなく米国プラグマティズムが大きな影響をもっている。プラグマティズムは戦前から知られていたが、論理実証主義と同様、大学の哲学には影響力をもっていなかった。戦後は米国式の教育学の影響で大きな力をもったが、哲学ではプラグマティズムは科学哲学と明確に区別されていた。伊藤の『パースのプラグマティズムー可謬主義的知識論の展開』(勁草書房1985)は、パースの哲学と分析哲学に類似性があるとして分析哲学者たちから歓迎された。この時期の彼の主要な著作は『人間的な合理性の哲学ーパスカルから現代まで』(勁草書房1997)。
・この時期にはフレーゲの翻訳が全6巻で出た。これは世界的にも最も包括的なもので、野本和幸らの努力によってなされた。

…伊藤先生!」

B「伊藤もフルブライトで米国スタンフォード大学に留学している。それはともかくとして、80年代以降の記述はかなり羅列気味で、ある意味では分析哲学や科学哲学の多様化を示しているとも言えるが、別の意味ではあまりに時代が近すぎて、うまく思潮のあり方を把握できてい

ないようとも言えそうだ。現代に近付くにつれ、歴史を書くことが難しくなることが示されていると言える。」

A「まだ歴史になりきれていないということですか」

B「現代史というのは経験というか情報量が多すぎて、遠くから見ればわかるような流れやうねりが捕みにくいということでもあるだろう。しかし、遠くになりすぎると、今度は細かい流れや影響関係が見えなくなる。歴史を書くのにほどよい距離というのが存在するのかもしれない。」

A「ちょっと一服しますか」

B「うむ」

第四回「ところであなたは分析哲学者ですか?」(20241030)

B「さて、続きだ。前回の要約をしたまえ」

A「え、いきなりですか。だいたいですね。1960-80年には大森や黒田のような第一世代のオリジナルな研究が登場したという話と、1980-2000年には(科学的な哲学という意味での)言語哲学や心の哲学のような領域においても、また(個別科学の哲学という意味での)科学哲学においても、分業化や学際的研究が進んだという話が出ていました。また、その文脈で加藤尚武と飯田亘之の生命倫理研究の話も出ていました。永井均や野矢茂樹のようなウィトゲンシュタインにインスパイアされた研究者も独自の路線を歩み、さらに上記に分類できない人として現象学の背景もある野家啓一やプラグマティズムを分析哲学的に研究した伊藤邦武もいるという話だったと思います」

B「まあそんなところだな。男性しか出ていない点から見ても、分析哲学紳士録名簿という感じだな。歴代のウルトラマンか仮面ライダーを一挙に説明しただけの感じもしないではない」

A「それは言いすぎだと思いますが、やはり現代になるにつれて取捨選択したり大局観を示したりするのが難しくなるでしょうね」

B「では、先を急ごう。次に行ってくれ」

A
「はい。次は「**日本の分析哲学の発展に影響を与えた諸要素(5 Factors that influenced the development of analytic philosophy in Japan)**」です。ここは5つの小項目に分かれています。まず、「5.1 学術的背景」。
・戦前には論理実証主義に関心をもった生物学者の篠原雄(たけし)のような者もいたが、東大や京大の哲学科と直接の関係をもたない科学者がほとんどだった。
・戦後は状況が変わり、若い哲学者が、とくにアメリカ研究セミナーで教えに来た米国哲学者から学んだ。
・アメリカ研究セミナーに出た大森荘蔵や沢田允茂は米国に留学した。大森は1951年にできた東大科哲に1954年に教員となり、沢田はすでに職があった慶應で教えた。
・植田清次(せいじ)がいた早稲田も分析哲学の拠点だった。
・関西では、京大で科哲ができたのは1993年。武田弘道がいた大阪市大が拠点だった。」

B「先にも述べたが、内井先生が京大に科哲を作る頃には「科学の哲学」として科学哲学を理解していたように思われる。物理学の哲学とか、生物学の哲学とか。もちろん論理学も教えていたが、「分析哲学」の手法を意識して教育されていたわけではなかった」

A「そうなんですね。次に行きます。

・70年代までは分析哲学を学べる大学は限られていたが、80年代以降は分析哲学の第二世代が各地で教え出した。

第二世代は戦後生まれで、1945年から50年代までに生まれた人ですね。

・しかし、分析哲学は日本の哲学科の主流とは言えず、伝統的には過去の西洋の古典的哲学者の研究が中心だった」

B「この、**分析哲学は日本の哲学科のヘゲモニーを取れなかった**、あるいはまだ取れていない、というのが飯田先生らの日本の分析哲学評価のようだな」

A「どうなんでしょうね」

B「まあ、その話はあとでも出てくるから、先を急ぐことにしよう」

A「はい。次は「5.2 学会、コロキアム、セミナー」です。

・1970年代以降、ほとんどの分析哲学者が所属する二つの学会があり、両者は英語では「科学哲学」の名を冠していた。**科学基礎論学会**(Japan Association for Philosophy of Science)と**科学哲学会**(PSSJ, Philosophy of Science Society, Japan)。前者は1954年に設立され、当初は科学者と哲学者の対話を促進しようとしていた。
・後者は1968年に設立され、当初から分析哲学者中心の学会だった。
・科学基礎論学会は学会誌として『科学基礎論研究』と英独仏で寄稿できるAnnals of the Japan Association for Philosophy of Scienceがある。科学哲学会は『科学哲学』がある。前者は春、後者は秋に学会があるので、相互補完的である。
……合併したらどうですかね」

B「いろいろ協力しているようだから、そういう話がないのか、今度尋ねてみるか」

A「よろしくお願いします。学会運営も学会費も大変でしょうから。次に行きます。
・関西では京都科学哲学コロキアムが1975年に設立。2012年に解散し、京都現代哲学コロキアムに引き継がれている。京都科学哲学コロキアムでは、神野慧一郎編による『現代哲学のフロンティア』(勁草書房1990)、『現代哲学のバックボーン』(勁草書房1991)が出版された。
・名古屋では名古屋哲学フォーラムが1985年に第二世代の服部裕幸、柴田正良、横山輝夫によって創設された。

……ちなみに、この「コロキアム」って何なんですか」

B「やっぱりローマのコロッセウムみたいに殺っせ合うんだろう」

A「コロッセウム(Colosseum)とコロキアム(colloquium)は違うでしょう」

B「ゴホンゴホン。注に丁寧に書いてあるように、この京都現代哲学コロキアムは現在は活動中止しているようだな」

A「そうみたいですね。次に行きます。「5.3 出版社と翻訳」です。
・日本では大学出版会は戦後に設立されて日が浅かったため、主に民間の出版社が活躍した。とくに哲学のような人文書に関してはそうである。
・すでに見たように岩波書店、培風館(哲学の世界シリーズの翻訳)がある。横書きの文章だったのが特筆すべきである。」

B「たしかに内井先生の『科学哲学入門』とか『進化論と倫理』もそうだが、横書きに拘わるところがあるな。当然、数式があると縦書きが困難なわけだが」

A「科学は横書き、人文学は縦書き、的な拘わりがあったんじゃないでしょうか。次に行きます。

・80年代以降、分析哲学の発展に最も貢献したのは勁草書房。編集者の富岡勝(とみおかまさる)が多くの書籍を生み出した[29]。」

B「富岡さんには私はほんの少しお世話になったぐらいだが、伝説の編集者の一人だな」

A「そうなんですね。次に行きます。
・エアやライヘンバッハの翻訳を始め、翻訳も多く出されて分析哲学の一般的認知が広まったが、悪い部分もある。高名なクワインやフレーゲの著作や入門書はまだしも、それ以外の専門書は読む人は英語で読むので翻訳する意味がなく、出版社は翻訳をありがたがって日本人研究者によるオリジナルな著作を求めなくなり、また若手研究者の時間を浪費するからである。」

B「う〜ん。ここは納得できんな」

A「どうしてですか」

B「翻訳文化の弊害があるのは確かだが、昔から漢文やギリシアラテン語などの翻訳が教育の全てではないにせよ大きな位置を占めていたのにはそれなりの理由がある。一文一文を正確に理解するという精読には翻訳がよいし、日本語にきちんとする過程で筆者の思考の呼吸を掴んだり、自分の文章を練る練習にもなる。京大が英語の入試を全訳にしているのは、訳させれば語学力は一目瞭然だからだ」

A「マジレスですね」

B「とはいえ、誰も読まない本を翻訳しても仕方ないことは確かなので、学会などで毎年訳すべき本を選定するのがよい、というのが私の持論だ。この話をし出すと長いので、次に行こう」

A「はい。次は「5.4 国際交流」です。

---

[29] 勁草書房70周年の振り返りで少しだけ言及がある。
https://keisobiblio.com/2018/04/20/keiso70_shacho02/

・戦後、アメリカ研究セミナーで日本に来た研究者が決定的な影響をもたらした。クワインやホワイトはその後もやってきた。」

B「クワイン(1908-2000)は京都賞ももらってるな」

A「はい。1996年ですね。」

B「京都賞はもらうと死ぬと言われているが、たしかに2000年に亡くなっているな」

A「いやいや、チャールズ・テイラーは2008年にもらってまだ生きてますから、その主張は反証されていますよ」

B「そうか」

A「そうです。京都で京都賞の悪口を言うと表を歩けませんよ。では次に行きます。

・第一世代の日本人哲学者は米国に行って分析哲学のスタイルを学んだ。第二世代は米国で大学院生として学んだ。
・2002年にCOEプログラムが開始して海外から研究者を招聘できるようになるまでは、海外の分析哲学者はときどきしかこず、体系だったものではなかった。21世紀には変わることになる。
…このあたり、少し記述が荒くてわかりにくいですね。21世紀にどうなったんでしょうか」

B「ちゃんと調べていないが、COEやGCOEで国際交流が盛んになったということではないか。今は日本の大学は金がないからまた閉鎖的になっているかもしれないが」

A「なるほど。ちなみに飯田隆先生は70年代にミシガン大学に留学したようですね」

B「うむ。次に行きたまえ」

A「はい。**5節の最後は「5.5 ジェンダー」です。**
・戦前は女性は大学に入学できず、学制改革で入学できるようになったのは1947年だった。早稲田の植田清次編の『分析哲学研究論集』(1954-1960)に寄稿した女性はいなかった。
・1980年ごろから人文系で女性の研究者が現れ出したが、哲学ではまれで、分析哲学ではさらにまれだった。哲学は男性の研究テーマだと思われていたからだ。女性は分析的思考に適さないとも考えられていた。
・例外は第一世代の石黒ひでだが、海外で長く研究してから慶應で教えた。第二世代の井上治子は『想像力: ヒュームへの誘い』(三一書房1996)を書いた。

……たったの二人ですか」

B「そうだな。石黒は東大を出たあと、パリのソルボンヌ大学とオックスフォード大学(B.Phil)で学んでいる。井上も東大からオックスフォードのB.Phil(1982)コースで、ライルの『心の概念』の共訳もしている」

A「このようなジェンダーの偏りは日本の分析哲学の発展にどういう影響を与えたんですかね」

B「たしかに5節のタイトルは「日本の分析哲学の発展に影響を与えた諸要素」だが、それについてはとくに言及されていないようだな。どのぐらい男子校的な文化だったのか、検証する必要があるかもしれない」

A「ちょっと休憩しますか」

B「うむ」

二人、一服する。

B「さて、では最後まで行ってくれたまえ」

A「はい。最後の節は「**日本の哲学界における分析哲学の位置(6 The place of analytic philosophy in Japanese philosophical scene)**」です。
・日本の哲学は長い間、偉大な哲学者の著作を研究し理解するだけだった。分析哲学は自分で哲学をすることを教えた。たしかに西田幾多郎や京都学派の人々も自分で哲学をしようとしたが、分析哲学者とは大きな違いが二つある。一つは哲学における論理の重要性を知っている分析哲学者は、自分たちの議論(論証のあり方)に非常に気を遣っていた。もう一つに、日本的・アジア的なものを求めていなかった。科学と同様、哲学には国籍がないと考えていた。

……ゼルプストデンケン!」

B「京都学派も、彼らなりに論理には気を遣っていたんじゃないかと思うがな。まあそれはいいとして、この、哲学は無国籍料理だというのはおもしろいな」

A「私も、そういう雰囲気で教育されたからか、そう思っていますよ」

B「科学や数学や論理学はそれでよいかもしれないが、倫理になると難しい問題がある。今も、日本的な倫理、東洋的な倫理が必要だという人は多いからな。」

A「たしかに、日本人が西洋の倫理学ばかり学んで何の役に立つの、という意見はありますね。次に行きます。
・これら二つの分析哲学の特徴によって、哲学的議論や哲学的文章もスタイルも変化した。それまでは教員と学生は平等に議論に参加していなかったが、クラスで本当の哲学的議論ができるようになった。」

B「これは重要な指摘だが、分析哲学のおかげというより、多分に米国的な文化の影響がある気がするな。別にドイツで教授と学生の距離が遠い、つまりヒエラルキーがあるのは、哲学に限らないからな」

A「なるほど。次です。
・哲学の文章も難解なものが多かったが、分析哲学では明快に書くことがよい哲学的文章の必要条件とされた。」

B「これも、大雑把にはそうかもしれないが、例外もありそうだ」

A「時間がなくなってきたので次に行きます。
・伝統的な哲学をする者からは、**分析哲学は哲学ではない**と思われた。「科学哲学は哲学ではない」としばしば言われた。
・哲学に人生の知恵を求める一般読者も、分析哲学を哲学と思わない傾向にあった。
・ウィトゲンシュタインが例外であり、そのため出版社はウィトゲンシュタイン関連の本を出したがった。とはいえウィトゲンシュタイン以外の分析哲学の本で売れるものもあった。

……みんなウィトゲンシュタイン好きですもんね」

B「そうだな。売れ筋を狙うなら、何でもウィトゲンシュタインってタイトルを付けたらいいということだ。君も、本の名前を変更して、『Covid-19の倫理とウィトゲンシュタイン』『予防の倫理学とウィトゲンシュタイン』にしたまえ」

A「出版社に連絡しておきます。ウィトゲンシュタイン以外にも売れた本って、どんな本のことでしょう?」

B「論理学とかじゃないのか。賢くなるというイメージがあるからな」

A「最後です。
・結論。分析哲学は一般人の哲学のイメージを変えるところまではいかなかったが、大学の哲学では地盤を築いた。分析哲学は哲学の教え方を変え、哲学的議論に明快さが必要なことを人々に気付かせた。しかし、大学の哲学における影響力も限定的だったと思われる。分析哲学は大学の哲学科の哲学史研究に大きな変化をもたらさなかった。例外は古代ギリシア哲学研究で、この領域の研究者は分析的哲学に影響された英米の研究を積極的に吸収した。

…これで終わりです」

B「海外に日本の分析哲学の状況を紹介する文章のせいか、あまり批判的な話がないな。最後の部分も、「科学哲学は哲学ではない」という批判には、分析哲学はこれまでの哲学が扱ってきた重要な問題を扱っていないという批判があるのではないだろうか。たとえば今日では人生の意味や美学などが分析哲学的に扱われるようになったが、こうしたものが切り捨てられがちだったので、不満があったのではないか」

A「まあそうですね。できないことはないんでしょうけど、科学の発展が主に問題となり、主要な関心の外に置かれたということですかね。」

B「とはいえ、科学的世界観が我々の従来の幸福観とか人生観に与える影響を、もっと真剣に考えるべきだったとは言えないだろうか。これは分析哲学に影響を受けた今日の倫理学のフォーカスについても当てはまるかもしれない。」

A「そうですね」

B「また、科学哲学について言えば、科学者と哲学者はうまくやってるんだろうか。日本の分析哲学が健全に発展してきたのかどうかについて、問う必要がありそうだ」

A「そうですね」

B「そうですね、ばかりだな」

A「いや、もうお腹も減って疲れてしまい…」

B「ではまた来週ということにしよう」